
風が吹く方に

イチハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風が吹く方に

【Nコード】

N4658J

【作者名】

イチハ

【あらすじ】

超鈍感少女アリとそのお守り2名のほのぼの珍道中。

天真爛漫なアリに、心配性の戦士ライと神経過敏の優男クルガの3人は中央神殿を目指して街道をゆく。

笑い声とため息の絶えない3人の旅のあれこれ。

その1（前書き）

その1

夕暮れ。町が橙に染まり、闇がじわじわと東の端を侵していた。すぐにも闇に覆われそうな町の東外れ、槍を掲げて門の外を見守る警備兵の鎧が紫黒色の鈍い光を返す。高い塀に沿って設置されたランプにも淡く暖かな灯が灯り始めた。そろそろ酒場がにぎわい出す頃合いである。

東の門のすぐそばにある酒場には、朝から一日中飲んだくれている目の据わった者や、一仕事終えて帰ってきてかけつけ一杯を堪能する冒険者が乱雑に入り乱れていた。高すぎず安すぎずのごくごくまっとうな店なので、客層もまあふつつ。まだこの時間から暴れ出す馬鹿者はいない。普段なら和気あいあいと活気あふれる酒場なのだが、今日はどことなくピリピリしている。酔った勢いで今日の自慢話やら過去の栄光やらを大声で喧伝する者もちらほらいたのだが、そういった者は皆何故か徐々に耳打ちをされ、声を潜め始める。その耳打ちはカウンター席の近くのテーブルから広がってたようだった。

店の隅、カウンター席にドカツと腰かけている男が一人。周囲に人は居なく、その男だけが酒場の中でぽっかり浮かんでいた。ヒソヒソ話をしている者は皆そちらをチラチラと窺っている。見られている本人も気づいているようで、たまに視線の方へと目を向ける。向かれた方はあわてて視線を外し、冷や汗をかきながらあらぬ方向を見るのだった。その姿を見て男は眉を顰め、チツと舌打ちするとカウンターの方へと向き直る。舌打ちをされ、見返された方はヒツと声を挙げて少し青ざめた。

カウンター席の男は光沢のある黒い革のロングコートを袖を通さずに肩にかけており、腕を組みながらトントンと人差し指で腕を叩き続けている。五分丈の濃い灰色のインナーは男の鍛え上げられた筋肉に沿うように、ぴったりと凹凸おうちゅうを浮き上がらせていた。胸には青い石をはめ込んだ大きめのシルバーの飾りが鈍い色を放っており、太めの茶の革紐で首からかけられている。組まれたまま投げやりに放り出された脚は長く、立つとかなりの高さになることが窺える。髪も目も黒く、淀よどんで薄暗い空気の酒場では本来目立つことはないのだろうが、その男から伝わってくる怒りの気配が尋常ではなく、酒場にいる者全員が緊張の面持ちで様子を窺っている状態である。

男はどうやら誰かを待っている様子で、時折酒場の入り口を振り返っては、イラついたように琥珀色こはくの酒を呷あおるということを繰り返していた。男が店に入ってきてから1時間半、酒はすでに7杯目となっているが、酔った様子は見られなかった。男が飲んでいるのは決して弱い酒ではなく、むしろ店でも2番目に強い酒である。その酒豪っぷりに、緊張とは違う惚ほれ惚ほれした目線を向ける者も出てきていた。しかし大半の者は男を待たせている相手への憐あわれみの気持ちを抱きながら、とばかりが来ないようにとひっそりと祈っているのだった。

その1（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

初めての投稿ですので、読みにくい所や分かりにくい所があると思います。

その他気付いた点等ありましたら、ご指摘いただければ幸いです。
皆様に楽しんでいただける作品が書けるように頑張ります。

その2（前書き）

その2

酒場の扉が勢いよく押し開かれるのと、男がびくつと顔を持ちあげるのは同時だった。ボタンと威勢いせいのいい音と共に現れたのは、桃色や黄色の混じった淡い色のインナーの上に白い綿のワンピースを身にまとい、厚手のウールでできたフード付きの茶色のジャケットをはおった少女だった。店にいた者のほとんどが騒音の方向を向き、そして？と首をかしげた。

店をまちがえたのだろうか？いや、それにしても堂々たる開け方だったし、そもそも分かりやすいほど酒場的な雰囲気たたよを漂はらわせているこの店に間違まちがって入ってくる訳はない。春売りはるうか？それにしても幼いし、春売りはるうもこんなに堂々と入ってくることはない。目立ちすぎて逆効果だ。それに服装が春売りとはほど遠い。こんな可愛らしい格好では客は取れない。……ロリコン用か？いやいや、まさか、そんな変態な。というか、子どもはこんな酒場に来ちゃいかなだろ。様々な憶測が人々の頭の中を瞬間、飛び交った。しかし、答はすぐに出た。

「おーまーえーっ！！！！！」

カウンターの方から身の毛もよだつような唸り声うなが聞こえ、ガタンツと黒いコートの男が立ち上がった。カウンター近くの客は男から発される怒気どきに一齐に腰が引けたようになって、後ずさる。

そんな男の反応はお構いなしに、キョロキョロと店の中を見回していた少女は「ライ！」と喜色をあらわに、手を振る。

「すっごい探しちゃった。こんな所だったっけ？」

と悪びれる風わるでもなく、全く謝らずに怒れる男に近づいていく。猛たけ々しい怒りを辺りに撒き散らしている男に、酒場の者は皆恐慌状態きょうこう

であり、どちらが悪いかは置いておいて、とにかく何でもいいから謝って男の怒りを鎮めてくれー、と心の中で少女に向かって叫んでいた。

それを感じたのかどうなのか、少女は

「あれ？もしかしてライ怒ってるの？」

と全く空気を読まない発言をした。案の定、ライと呼ばれた男の体がフルフルと震えだす。少女は「あれ？あれ？」と何の足しにもならない声を挙げた。酒場の者はあーあ、と諦めの声を出し、二人からじりじりと離れ始めた。

「……お前の言ううちよつと行ってくるってのは、いったいどのくらいを指してんだー!!」

男が叫ぶ。

「えー。いつものことじゃん。待たせるの分かってるから酒場の前で別れたんだし」

少女がふてくされた様につぶやく。男のこめかみからピキッという嫌な感じの音が聞こえた、ような気がした。

男の腕が素早く振り上げられ、少女の頭上へと勢いよく打ち落された。男の怒りのこもった一撃を喰らって、少女が無事でいられる訳がない。店中の者がハッと息をのんだ。

しかし、予想されたような衝撃音がしない。振り落とされた男の手刀は少女の頭上スレスレの所で留まっていた。ホッと溜め息をつく音がちらほら聞こえる。男はギリッと奥歯を噛みしめた後、ドカドカと音を立て、少女の横を通り抜けて扉の外へと向かった。

「ここはお前が払え！」

男はそう言いながらボタンと大きな音を立てて扉を閉める。少女は平然と男の怒りを受け流し、マスターに伝票を請求した。しかしその表情は金額を見た途端歪んだのであった。

「待たせすぎちゃったみたい」

店で2番目に強いお酒は、2番目に高価い酒だった。

少女がため息と軽くなった財布と共に店から出ていくと、ライという男が未だ少し苛立った様子で扉の横に凭れかかっていた。

「お待たせ、ライ。ごめんね。行こっか」

少女がにこつと笑って声をかけると、ライは俯いてはあーと長い溜息をもらした後、のっそりと歩き始めた。

「いい加減、ふらつと出歩くのと道に迷うのはやめてくれよ。今度は一番高価い酒飲むからな」

と溜め息混じりにライが言うつと、それは困るなあと全く困っていない風で少女は笑う。

「アリといるとまるで俺が短気な男みたいになるだろ……」

勘弁してくれよ、とライは情けない声を漏らし、アリと呼ばれた少女はそんなライをただニコニコして見返すのだった。

男と少女が出て行った後の酒場では、さっきの二人のやりとりや関係やらを肴に大いに盛り上がっていた。皆の心の底には、とばかりを喰らわなくて良かったという安堵の気持ちが見え隠れしていたのだが、一番そう思っていたのはこの店のマスターだっただろう。男が店を壊したとしても弁償費用を請求できる見込みは低い、というよりは怖くてできないと思っていたマスターは、「何も壊れなくて良かった……」と二人が出て行った後思わずつぶいた。それを聞いた他の店員もほっと胸を撫で下ろしていたのだった。

その3（前書き）

その3

「ねえねえライ」

出店の立ち並ぶ通りを歩きながら、ア리가くいくいとライのコー
トを引っ張る。周囲からは焼き菓子の甘い匂いや果物くだもののみずみずし
い香りが漂っていた。

「何だ？もう今日は他のもの買う余裕ないぞ」

とライがアリを見下ろすと、違うよー、と頬をぷくつと一膨へふく
らませた後、「あそこの店、結構良心的なお店だったね」と領収
書をひらひらさせてにつこりとほほ笑んだ。

「伝票見たときはちよつと引いたけど、ライが飲んだのかなりい
いお酒だったでしょ。それにしても良心的な値段だったなあと思っ
て」

ライはあの店のメニューを思い浮かべ、「そうだな」と頷く。本
当は軽くつまんで2・3杯のつもりだったから、良心的な額に収ま
るつもりだったのだが……。そう思うとついじと目になってアリを見
てしまうのだが、アリは知らんふりで

「明日の夜はクルガも連れてあそこで食べよう！ ご飯おいしそう
だったし」

と店のマスターがすごい勢いで辞退しそんなことを提案した。ライ
はそうだなと適当に相槌あいづちを返し、明日の夕飯ではなく、今日合流す
るクルガのことを考えていた。

「何何？ おいしそうなお店見つけたの？」

背後から急に声をかけられ、ライがぱつと振り向くと、そこには
片方の髪を肩まで伸ばした薄茶色の髪の軟派そうな男が立っていた。
ベージュのマントにすっぱり覆われているため、どんな服装をして
いるかは分からない。

「クルガ！」

アリが歓声を挙げて近寄る。それよりも早く、ライはクルガの背後へと回ると、どこからか素早く取り出した小さなナイフをクルガの首筋へと当てていた。

「気配消して背後から近づくなと言っただろう……」

低く唸るライに、ありや、とアリは気の抜けた声を発し、クルガは「短気だなー」とへらへら笑う。

「でも声掛ける直前に気緩めたっしょ？」

とクルガが振り向いて弁解すると、「そうじゃなきゃ、もうお前は気絶させられている」とライがフンと鼻を鳴らした。「分かっているのはひどくない？」とアリに同意を求めると、アリは「ライは怒りんぼだからー」とにこにこ言う。

「違うだろ……」とライはがっくり肩を落とした。

「さつきもね、ライったら怒っちゃって……」

とアリが余計な話を始めようとしたので、「ちよつとと言って2時間待たされた」と端的に事実を告げる。店の前で30分、店の中で1時間半、合わせて2時間だ。

「アリもまたやつちやたんだねー」

クルガは苦笑いをし、めつと言ってアリにデコピンした。

「さて、どこの宿に泊ってるんだい？」

クルガがライを振り返って尋ねた。長旅で結構疲れてるからとりあえず荷物を置きたいんだけど、と背中^{たず}に背負っていたカバンを指さす。麻でできた丈夫そうなカバンはかなり膨らんでいる。ああ、と頷くと、ライは15メートルほど先を指し、その角を曲がってすぐだ、とクルガに伝えた。

「今回は安くてすごくいいお宿がとれたんだよ」

とアリがクルガの手を引っ張る。「そうなんだあ」とクルガはほつとした顔をした。前回の幽霊宿が正直身に堪えていたので、内心ビ

クビクしていたのだ。別に怖がりではない、断じて。ライも前回の宿を思い出していたようで、

「あれは人の姿がないのに気配が濃密すぎて気が休まらなかったな」と溜め息をついた。お前は俺より辛かっただろうと憐れあわまれたが、本当にそうなのでただ頷いた。宿中に大量の思念が行き場を失って漂っていて、思念酔いしてしまったのだった。仕方なく次の日に一人大掃除をしてきたようになった。その分宿の亭主が宿代をただ同然にしてくれたのだが…

「前はちよつとさびれたお宿だったけどすつごく安かったし、私たちって宿運すごいいいねー」

超鈍感のアリは一人にこのこと鼻歌交じりに言い、ライとクルガは同時に溜め息をついたのだった。

アリと一緒にいると疲れる…。

その4（前書き）

その4

「とうちゃーく」

タンツと少し跳ねてアリが宿の前に立つ。アリの手に引つ張られ、クルガが少し体勢を崩した。

「うおっ…と。あれ、ここ…？」

宿を見上げたクルガがしかめっ面でライの方を見た。

「皆まで言っな」

ライが仏頂面^{ぶつちやうめん}で応じる。

クルガ達の前には、この国一番の高級お宿グループ“ソントルク”の豪奢^{じゆうしゃ}な建物がそびえていたのだった。

この宿、安い部屋でも1泊朝食付きでお1人様100テソ。普段泊っている宿がだいたい1人20テソくらいなので、馬鹿高いことは容易に察していただけるであろう。

ちなみに、普段の朝・昼・夜の食事代が合わせて20テソである。「僕たちお金に余裕あるほうだとは思っていたけど、こんなにお金持ちだったっけ？」

乾いた笑いを漏らしながら、クルガがつぶやく。「まさか…」とライも頼りない声で返すのだった。

「それで…、この宿の1階でいいのかい？」

クルガは気を取り直し、アリの顔を覗^{のぞ}き込みながら尋ねた。アリはぶんぶん顔と顔を左右に振り、

「違うの。3階なの。一番上は無理だったの」

と無邪気に笑う。すうつとクルガの意識が一瞬遠のいた。

「3階…。3階…。130テソは下らないな…。いったいどうしたことだろう…」

クルガはぶつぶつと3階と130テソという言葉を繰り返した。始め

その様子を少し目を見張って眺めていたアリであったが、
「クルガよく知ってるね。3階って130テソもするんだって！」
と元気よく応える。

「はは、昔、女の子にせがまれて無理したことがあるのさ。ははは
は。結局無駄金になっちゃったけどね」

ベッドの上でねだられては断れないだろう、と機が動転したのか
あらぬことを口走るクルガの脳天に、ライが軽いチョップを喰らわ
した。

「阿呆。^{あほう}アリの前でそういう話はするな」
じろつとライが睨^{にら}む。アリは「クルガは女の子と来たのか。お金
あるなー」とのほほんとしていた。ベッドの件は耳に入っていない
と思いたい。

「あ、うん…ごめん。…で、さっき安いって言ってなかったっけ？」
クルガは少しショボンとした後、気を取り直し、今度はライに向
かって尋ねた。

その問いにライは1つ頷く。

「どう考えてもこの宿は安くないだろ。いったいどういうことなん
だい？」

まったく分からないといった感じで、クルガは腕組みをして考え
始める。ライはただそれを見ているだけで何も言わない。

「あのね、すごくいい人だったんだ」

考え込んでいるクルガに向かって、アリが答にもならないことを
言う。クルガは一瞬、この子やっぱ頭が緩^{ゆる}いのかなと思ってしま
った。

「どういうこと？」

ライに詳しい話をしると促す。ようやくライもお宿探しの顛末^{てんまつ}を

話
始
め
た。

その5（前書き）

その5

昨日の昼過ぎ、トーガという町にたどり着いたアリとライは、南の門をくぐって町へと入った。南北東西の道をつなぐ要所の町であるトーガはなかなか栄えており、出店の数も豊富で、旅装の人々で賑わい^{にぎ}をみせている。

「おつきい町だね」

行き交う人々を眺め、アリがほうつと感嘆のため息をこぼす。首都コーデルを知っているライとしてはそこまでもないが、「そうだな」と頷き返した。今まで旅してきた中では一番大きな町であることは間違いない。

「うわー、見て」

とアリがライのコートを引っ張る。アリの目線の先には生菓子や焼き菓子が軒先にデコレーションして飾ってあるお店があった。

「まず宿だ」

甘い匂いに物欲しげな顔を浮かべるアリを引っ張って、宿探しを始める。

このくらいの大きさの町なら、安全で清潔で手頃な宿があるはずだ。だんだんと首都コーデルに近づいてきて、行き交う物も人も増えてきている。夕方までのんびりしていたら、安かろう悪かろうの宿か、馬鹿高い宿しかなくなってしまいかもしれない。

あうーと奇声を漏らしながら、アリはライに引きずられるように出店の並ぶ通りから連れて行かれた。

出店のおじちゃんおばちゃんはそんなアリたちを微笑ましく眺めていたのだった。

南の出店通りから離れて東門へと進んだところに、そこそこのレベルの宿が並び立つ区域があった。

「あれとあれとあれとあれの中でどれがいい？」

大通りに面した宿をぐるりと眺めると、ライは4つの宿を指さしてアリに聞いた。

大通りに面している宿ばかり選んだのは、町の人の目が届きやすく、盗難や強盗の被害に会いにくいからだ。特にここ最近はライ一人でアリのお守りをしているため、正直疲れている。万が一のことがあっても気配を察して起きれる自信があまりない。

次に、2階の部屋が空いてそうであり、なおかつ出窓じゃない宿という理由で4つに絞り込んだ。これも防犯上の理由からだ。1階は外から侵入されやすいし、最上階も屋根からの侵入経路がある。2階であれば、いざという時アリを抱えて飛び降りることも可能である。総合的に見て、2階が無難な選択だ。出窓も見えてくれはいいが、外からの侵入が容易たやすいいため選択肢から外れる。そうなると、さっきの4つの宿しかないのである。

「うーん、あれ！」

アリはうーん、うーんと唸うねりながらしばらく4つの宿を見比べていたが、意を決し、角に一番近い宿を指さした。

「理由は？」

ライが尋ねると、「雰囲気！」とアリが答える。

「雰囲気つつたって、宿の中までは分かんないだろ」

あきれた声で返すと、わかるよー、とアリは自慢げに言う。

「だってね、あそこの宿が一番窓がぴかぴかだもん。いつも磨いてないとああはならないよ。それに、お店の前のお花も一番元気。きつとちゃんとお水あげて大切にしてるんだよ。看板もシンプルだけど結構素材がいいものでできてるし、きつと細かいところまで気の配られたお宿だよ」

あそこがいいよー、とぴよんぴよん跳はねながら力説するアリ。それを見て、本当は馬鹿じゃないんだよなー、とライは心の中でつぶやく。しかし如何いかんせん、行動が馬鹿っぽい。この埋めがたい隔へだたり

が埋まる日は来るのだろうか。それを思うと憂鬱になるライであった。

そんな二人のやり取りをちよつと離れた軒先で見つめていた中年男性は、アリの力説を一通り聞いたあと、二人に声をかけた。

「そこのお二人さん、あそこの宿に決まったのかい？」

ライは胡散臭げに振り向くと、「そうです。今から行くところです。だから結構です」と、先手必勝とばかりに畳み掛けた。

男性は一瞬、虚を衝かれたような表情を浮かべたが、そのあと、おやおやおや、と笑い声をあげた。

「いやいや、客引きと間違われるとは」

これはまたおもしろい、とクツクツと笑い続ける。ライは訝しげな顔をして男性を見、対照的にアリは何かおもしろそうな人と会ったと、目を輝かせていた。

「私はあそこの宿の主でな、お嬢さんのさっきの話を聞いて、感心したところだったんだ。よく気が付く賢いお嬢さんのようだね」

宿の主はアリを見つめてニコリと笑った。アリもつられて笑い返す。

よく見れば着ている物も上等で、客引きには見えない。こざっぱりとした、それでいて趣のある人物である。「これは失礼した」とライが慌てて謝った。

「いや、こちらこそ道端で急に話しかけたのがいけなかった。しかしお嬢さんの観察眼に感心してしまつてな。小さいのに本当に賢そうだ」

宿の主は孫を見るかのように、目を細めてアリを見ていた。

小さい……。確かにアリは小さいが、きつと身長のことではないだろう。ライは二人の様子を観察して密かに唸った。いったい何歳くらいだと思っているのだろうか。…12歳くらいだろうか。

「私、これでも15歳なんだけど…」

おずおずとアリが自分の年齢を口に出す。宿の主の目が少し見開かれた。

「来年には成人か。これは失礼したな」

10歳くらいかと思っていたのだが…。宿の主がこっそり漏らしたのをライはちゃんと聞いていた。

やはりアリにはもう少し大人っぽい^{かっこいい}恰好をさせた方がよいかもしれない、と考え、それについては明日合流するクルガに任せようと丸投げにした。ライにとっては、年頃の女の子の服やら趣味やは理解不能なのである。

「それはさておき、観察眼の鋭いお嬢さんに我が宿をお選びいただき、けて光栄だ。普段地道に手入れをしているうちの従業員も、お嬢さんのお褒めの言葉に報われることでしよう」

さあ、どうぞ、と宿の主に導かれ、主の手入れの行き届いた宿へと向かったのだった。

その6（前書き）

その6

「ようこそ、テールの宿へ」

宿に入ると、受付の女性が笑顔で出迎えてくれた。ゆるいウエーブのかかった金髪が肩の上でふわりと揺れる。

「お知り合いですか？」

女性は二人を連れるように入ってきた主の方を見ると、やや棘とげのある聞き方をした。

「左様さよう。さっきそこで知り合った」といたずらっぽく笑って答える宿の主。女性は小さくため息をつく、困ったような笑顔を浮かべた。

「きつと急に声をかけたのでしょうか。驚かせてしまいましたか？」

二人に向き直って、すみませんと女性が謝る。

「いつもこうなんですよ。気に入った人を見ると連れてきてしまうんです」

とやれやれといった顔をする。

「いや、こちらとしても、もともと利用するつもりだったので問題ない」

ライが答えると、主はほれ見い、とやや勝ち誇った顔をして女性を見た。

「そういう問題ではないです、叔父さん」

呆れ顔で主を諫める受付いさの女性。

「二人は親戚なんですか？」

そういえば、髪質はおんなじー、とアリが二人を見比べて言う。

「ええ、そうなんです」

と女性はアリを見てにこにこ答え、よく似てないって言われるんですけどね、と付け加えた。

「申し遅れたが、私はこの宿の主、マーウオイだ。こちらがサーシャ。姉の娘なんだよ」

サーシャがぺこりと頭を下げる。

「俺はライ。で、こっちがアリだ」

ライは軽く頭を下げ、紹介されたアリは、はいと手を挙げた。それを見てくすくすと微笑^{ほほえ}ましいものを見る目で笑うサーシャ。これはまた年齢を大きく下に見られたな、とアリを見下ろしてため息をついた。

マーウオイはサーシャに2つ3つ指示を伝えると、用事があるのでとりあえずこれにて失礼、と言って奥の部屋へと入っていった。アリがバイバイと手を振る。

主である叔父の指示に頷き、受付のお姉さんモードになったサーシャは、ライに細かい質問をしていく。

「2階の大通りに面した部屋がいいのだが。それと明日もう1人合流することになっていて…」

ライがこちらの要望を伝えて値段交渉をしている間、アリは手持無沙汰になり、宿の入り口付近に置いてある雑貨を眺めていた。

この町の門や出店の様子などが描かれた絵葉書のセット、おいしいお菓子屋さんガイド、この町の紋章が刺繍^{しゅう}された巾着袋、きれいな青色に染められた組み紐の飾りなど、どちらかといえば女性向けのお土産が置いてある。

アリは隅に置かれていた手のひらサイズの小物入れに気付くと、手に取ってじっくり眺めた。小物入れは黒く艶^{つや}のある塗りが施してあり、小さなクリスタルが模様のように嵌^はめ込まれていた。絵本で見た北限^{ほくげん}の夜空みたいだと思う。中を開けると、黒いふかふかした布で覆われている。きつと装飾品を入れる小箱なのだろう。蓋を閉じるとひっくり返して底を見た。

「値札がついてる。やっぱり売り物なんだ」

他の雑貨に比べて作りが丁寧で高価^{たか}そうだったのでディスプレイかもしれないと思ったのだが、底の真ん中に他の品と同じように白い小さい紙がぺたつと貼つてあった。値段^{にじ}が滲^{にじ}んでいてよく見えない。小箱を近づけて目を凝^こらす。

「えっと、5？ 5P……5ピリア！」

くわつと一気にアリの目が見開かれた。5ピリアは500テソである。こんな宿の片隅にある小物入れにつけていい値段ではない。

「高価^{たか}すぎるよ……」

がつくしと肩を落とすアリ。見間違いではないかともう1度箱を逆さまにして、値札を見ようとしたのだが、値札の左端が丸まってその下に何か彫り物があるのが見えた。

「何だろう？」

ちらつと受付前のライを見て、こちらを見てないことを確認すると、爪の先でちよいちよいと値札を捲^{まく}りだした。もちろん不法行為である。傷をつけたら買い取りになってしまうので慎重に値札を捲^{まく}つていく。とりあえず3分の2くらい剥^はしたところで一息ついた。

「文字かな？ でもこんな文字知らないな。飾り文字とか？ それにしても字の規則性がよく分からない……」

うーん、と首を傾げていると、頭上から「おい」という声が降ってきて、同時に手から小箱が取り上げられた。

「ほあつ」

慌てて振り向く。ライが二人分の荷物を脇に置き、小箱をじろじろと眺めていた。値札を捲^{まく}つていたのは見られてないだろうかと内心焦る。その様子に、ん？とライは一瞬訝^{いぶ}しげな顔をしたが、まあいいか、と小箱を商品の置かれたテーブルに戻し、「部屋行くぞ」と言つて荷物を持って階段を上がり始めた。

小箱が気になってちらつとそちらを振り返つたのだが、

「マーウオイさんのご厚意で部屋に焼き菓子とお茶を用意してもら

えるそうだ」

という言葉を聞くと、底に彫られていた不思議な文字のことなどは頭の中からすっかり飛んでしまいうりなのだった。

その7（前書き）

その7

部屋に書いて旅装を解いたアリは、マウオイさんの差し入れのお菓子とお茶に取り掛かった。ライはお茶を飲み干し、二人分のお菓子を一口ずつ食べると、「後はやる」と言つて荷物を解き始めた。足をバタバタさせながら「はうー」やら「んー!!」やら奇声を挙げるアリを横目に、ライは淡々と仕事をこなす。

「おいしかったねえ」

紅茶を飲み干してほうつと息をつき、ご満悦のアリはライを振り返った。ベッドに腰掛けているライは片付けを終え、武器や道具の手入れをしている。ライはアリの問いかけに視線を上げることもなく、「ああ」とだけ答えた。どうでもいいと言いたげなライの答えにも、アリは満足気な様子でうんうんと頷く。

「やっぱり私の目に狂いはなかったとこだね」

にんまりと目を細めながら、立てた人差し指を左右に振った。そしてベッドに腰掛け、二・三度体をゆすつて感触を確かめると、「ふかふかー」とベッドに倒れこんで仰向けになった。かと思うと、起き上がって窓にとびつく。

「大通りが見渡せるよ。上から見ても、やっぱりすごい出店の数」にぎわう大通りの様子を眺め、嬉しそうに言う。あれはお菓子屋さん、あれは洋服屋さん、あれは雑貨屋さんかな…、と窓にかじりつき、お店を眺めては明日のお散歩コースを模索するアリであった。

「あー!」

窓の下を眺めていたアリが突然大声を上げた。

「どうした?」

不審そうな顔でライが尋ねる。

「えーとね、通りに派手な感じの人たちがいたんだけど……。派手

っていうか、目立ってっていうか。で、上から見たら、この宿に入
ってったから……」

「目立って？」

ライがアリに訊^きく。アリはうーん、と唸^{うな}った後、

「機嫌の悪い男女。美形の」

と状況のまったくわからない答えを告げた。はあ？とライが気の抜
けた声を出す。

「うーんと、……すごい美人な女の人で、すごい速さで歩いてて、
男の人が追いかけてて、それも美形で、追いついたらビンタされて、
そしたら口論になって。で、何か分かんないけどここに入ってきた
の」

どうやら男女の一部始終をアリは上から眺めていたらしい。

「結構人だかりもできてたんだよ」

アリの単純化された説明から何となく状況を読み取ったライは、
ああと頷いた。アリの説明は要領を得ているのか、いないのか、い
まいちよく分からない。

「あの二人泊まるのかなあ？」とアリは首を傾げる。道具の点検を
終えたライは「さあな」と投げやりに答え、伸びをした。

「ここ、食事処も併設してるから、そっちかもしれないぞ」

「あ、そっか……」

アリが残念そうにつぶやく。「泊まったからってどうするんだよ。
覗きでもするのか？」とライは思ったが、その言葉は飲み込んだ。
本当に覗き見にでも行かれたらたまらない。

飲み込んだライの溜め息も知らず、アリはさっきの食事処という
言葉にすっかり気持ちを移していた。

「ねえねえ、今日の夕飯この宿でとろうよ」

さつき菓子食ったばかりだろ、というつつこみも飲み込んで、ラ
イは「そうだな」とうなだれた。

いろんなことに飛びついてはくるくる興味が変わって、結局食べ

物に至るアリの思考に、分かつてはいるが、少し苛々が募る。
こんなとき、クルガの到着が待ち遠しくなるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4658j/>

風が吹く方に

2010年10月11日15時23分発行